

図書紹介

C. C. Webster & P. N. Wilson. *Agriculture in the Tropics*. London : Longmans, Green and Co. Ltd., 1966. ix + 488 p.

熱帯農業については、なんといっても、イギリス人が最も豊富な経験をもつ。

ここに紹介する「熱帯農業」の共著者のひとり C. C. Webster 博士は前マラヤゴム研究所長であるが、マラヤ以外、ケニア・西インド諸島・タンガニカにも勤務し、過去32年にわたって熱帯農業にとりくんでいる。もうひとりの共著者 P. N. Wilson は現在 Unilever の研究室に働いているが、過去13年、東アフリカの Makerere 大学および西インド諸島大学で熱帯畜産学を講じてきた。

イギリスの熱帯農業についての過去の業績を背景として、著者のこの現地研究にもとづく、熱帯農業の概説書が本書である。現在の日本の熱帯農業研究の水準にくらべ、はるかに高いものであることを、残念ながら認めないわけにゆかない。

本書は、熱帯農業の基礎的な諸条件を明らかにし、熱帯の作物栽培および家畜飼養改善のための、既知の農業技術研究の総括を目的としている。

したがって、その内容として、まず熱帯農業の自然的条件である気候（気候型・降水・湿度・気温・日照）、土壌（熱帯土壌調査と分類・丘陵地傾斜地低台地の土壌・沖積平地と低テラスの土壌、なおこの章だけは H. Bine 博士の執筆）および植生（主要植生形態）をとりあげる。つぎに社会的要因として、技術水準・社会構造・伝統と信仰・人口密度と分布・健康と栄養・土地制度と相続を考察する。

本論に入って、熱帯農業において、きわめて重要な問題である土壌および水保全が最初に考察される。つぎは、開墾・耕起および雑草駆除の章となる。これをうけて、一年性作物栽培における肥沃度維持の問題となる。これは3章にわかれ、移動（焼畑）耕作、移動耕作の改善形態、水稻生産なる永久的作付形態のそれぞれにおいて、地力維持方法が分析される。転じて、樹木および灌木作物、すなわち熱帯農業の重要部

門である樹園作物の考察となる。ついで熱帯農業の、もうひとつの部門である自然草地が自然草地の形態・放牧による利用の2章にわかって検討される。これに飼料作物の栽培と牧草地の章がつづく。最後は家畜飼養についてであって、熱帯家畜の種類、家畜の熱帯環境への適応、熱帯における家畜管理、熱帯における家畜改善の3章があてられる。

本書は、個別の作物や個別の家畜についての説明はそれぞれの専門書にゆずることにしている。（たとえば、これがその1冊である Tropical Agriculture Seriesにしても、ココヤシ、茶、米、熱帯内陸漁業、熱帯養蜂、ココア、熱帯畜産入門などの諸書の刊行を見る）。したがって、巻末に30ページにわたっての参考文献目録がつけられており、より詳細な研究への手引きとなっている。

わたくしは、本書は熱帯農業概論書として最もすぐれたもののひとつであると思う。もちろん、広く熱帯全般についての敘述であるだけに、東南アジア農業としては不十分であることはいうまでもない。しかし、東南アジアの農業を理解するために、ここに強調されているプリンスプルは、きわめて有効に役立つにちがいない。その意味で、東南アジア農業の関係者にも、ぜひとも一読をおすすめしたい。（本岡 武）

Nicholas Tarling. *Southeast Asia, Past and Present*. Melbourne : F.W. Cheshire, 1966. xvi + 334 p.

著者 Tarling 博士は、2年ばかり前に、京大東南アジア研究センターを訪れられた。そのときは、オーストラリアの University of Queensland の東南アジア史担当講師で、すでに、

British Policy in the Malay Peninsula and Archipelago, 1824-1871, 1957.

Anglo-Dutch Rivalry in the Malay World, 1780-1824, 1962.

Piracy and Politics in the Malay World, 1963.